

下関開業時代における岡研介の事績 及び寄寓背景に関する考察

——本州西端の海港に見る文政末蘭医学の展開——

亀田 一邦

九州国際大学

受付：平成22年5月27日／受理：平成22年9月17日

要旨：長崎遊学を終えた岡研介は、文政12年初春に下関で開業し、同13年3月中旬までを当地で過ごした。その期間中に『岡常用方』を著し、『生機論』の訳述を完成させた。また蘭学を教える生葦塾を創設し、約20名の学生が在籍した。生葦塾では西洋医学はもとより、蘭語学、生理学等の基礎的、補助的学問も重視され、医学の系統的教授が行なわれた。来関は縁族となる親蘭派の有力者・佐甲家の招きに応じたもので、研介を抱医として本陣及び私邸の医務を統括させる意図があったかと思われる。滞在は約1年と短かったが、医育・著訳述の方面に確かな成果を残し、研介の活躍によって下関蘭学の極盛期が実現した。

キーワード：岡研介、生葦塾、『岡常用方』と『生機論』、佐甲宗勝、下関蘭学

はじめに

大正期に横山健堂¹⁾が先鞭をつけ、呉秀三²⁾、田中助一³⁾が継承発展させた岡研介研究は、昭和48年に三宅紹宣論文⁴⁾が出て以来、事歴や思想を包括的に考察する文化史学的研究はなく、空白状況が長く続いている。先人により生涯の足跡はある程度まで掌握されたが、それはあくまで大略を示したに過ぎず、実際の所、医人研介が長崎や大坂でどんな生活を送っていたかという点まではよく分かっていない。

研介関連の資料は比較的伝存するほうである。早稲田大学図書館(洋学文庫)には岡家旧蔵の自筆稿本類が一括寄贈され、天理図書館の『生機論』(自筆稿)とともに貴重資料の双璧をなす。また山口県立文書館及び平生町立図書館にも所蔵があり、他との重複も多いがそれでも一読の価値を失なわない。だが先行研究はこれらを十分に活用できておらず、そのため研介伝には不正確な記述が氾濫する。岩国開塾説などはその最たるもので、

あのような訛伝が一度も検証されず、簡単に通説化してしまう所に従来の研介研究の甘さが指摘できるかと思う。よって新研究を起こそうとすれば、まずは自筆稿本類の徹底した閲読が求められ、あわせて地方資料中に関係記事を捜究するのが、オーソドックスながらも最も有効な方法と結論されることになる。

ところで研介は上坂後まもない天保2年10月前後には精神性疾患を発し⁵⁾、帰郷療養を余儀なくされるが、平生・岩国でも病状は一進一退を繰り返し、快癒することはなかった。そのため研介の学究生活は実質的には発病により終結したと見られる。ただし施療は天保8年頃まで確認され⁶⁾、名声も周東地方では後々まで衰えることがなかった。しかし発病後は西洋医学への批判的言辭が見し⁷⁾、晩年の治療・投薬も意識的に蘭方を避けた感がある⁸⁾。そういった点を考慮すると、蘭学者、蘭方医としての岡研介の学問、思想、技術の熟達度は上坂直前の時期に頂点に達し、そこにこそ最後の英姿が存在したと思料されるのである。

その最盛期中核に位置するのが、ここに取り上げる文政末の下関開業時代である。研介は当地で蘭学者、蘭方医として短かくも充実した時間を過ごし、下関蘭学の発展に寄与、本邦蘭学史上にも注目すべき業績を残している。それらを医育と著訳書撰述の問題を軸に把握しようとするのが本論のねらいである。

また今日まで下関の蘭学を論じた研究はないことから、必要に応じて文政前後の状況に触れ、それらと関連させながら研介来関の意義や寄寓の背景についても考察したいと思う。

(1) 来関時期と滞在期間の検討

呉が大正13年に発表した研介伝には、発病後の内容にかなり過誤があって訂正を要するが、研介の下関開業を初めて記したのは呉であり、その点の評価を怠ってはならない。呉は2ヶ所において次のように述べている。

- ① 何時の頃にか、研介は其萩の後大阪の前に馬関に於て開業し居たることあり⁹⁾。
- ② シーボルト先生疑獄の時は既に吉雄塾にあらざりしものゝ如し、此間郷里にありしものか、或は赤間関に開業し居たるかは詳ならず。(1830年頃天保之初)¹⁰⁾

翌々年に再版されたシーボルト研究の名著にも同様の記載がある¹¹⁾。①は自筆稿『雑録』に「卜居 萩 赤関 大坂 岩国 或一年或数年」¹²⁾とある点を論拠とする。また②は淡窓日記(『懐旧楼筆記』巻27, 29, 『欽斎日曆』巻3)に基づく推論であろう。いま諸々の資料に徴して、長崎を離れる頃からの関連事項を時系列的に並べると次頁の表ようになる。

表によって離崎＝文政11年7月頃、来関＝文政12年初春、離関＝文政13年3月中旬と推定される。このうち下関寄寓の時期は最も曖昧である。早ければ11年秋冬の来関もありえるが、最も信のおける『岡常用方』自序に「文政己丑、余、赤関に寓す」と明言するため、文政12年と考えるべきであろう。研介がシーボルト事件発生前に長

崎を去ったことは、遊学から戻った加藤俊民が淡窓師にもたらした情報中に「研介、去秋、防に帰り、再びは崎に至らずと云ふ」¹³⁾(『欽斎日曆』巻3, 文政12年2月3日の割書)と見えている。長崎を出てからの数ヶ月、どこで何をしていたかは判らないが、筑前の武谷家などは蘭学者を厚遇、高野長英が長逗留した例もあり¹⁴⁾、豊筑各地の親蘭家や同業者のもとに滞在しつつ、ゆっくり東上したことが予想される。

禁書一件は種々の興味深い点を含み、別に稿を改めて考察したいので、ここでは詳論を控え、必要なことを最小限述べるに止める。何といたっても究明すべきは召喚時の研介の居場所である。これについては『雑記』(天保6年12月2日)に「禁書ノ事ニ付下関ヨリ鎮台ニ赴キシ時ニ云々」¹⁵⁾と明記され、『懐旧楼筆記』巻27が「コノコロハ、長崎ヲ去ツテ、赤馬関ニ客タリシガ、長崎大尹ヨリ急ニ召サルルコトアリテ、彼地ニ赴ケリ」¹⁶⁾(同年2月3日)というのと一致するから、在関中の出来事であったと断定される。本件は吉雄新作・稲沢草庵師弟の拘引に発端した。両名は2月8日～3月4日まで入牢吟味が続き¹⁷⁾、入手経緯が判明した結果、譲渡側の研介に召喚状が届いたのは2月中旬以降と見られ、遅くともそれまでには下関に居留していたはずである。そして3月に長崎に滞在、同27日の処分決定後は再び下関へ戻ったようである。

下関の亀山八幡社家の宜園生・菱形真澄は、在関旧門人と淡窓師との書簡往復の仲介役をつとめたが、文政12年3月19日に預かった手紙は、福原仙菴と広江力太郎(後の西島秋航)分のみであり、そこに研介宛は含まれていない。淡窓は4月4日に賀来佐一郎が長崎から帰郷の途次に持参した研介の手紙で、初めて禁書一件と下関寄寓の事実を知った。ただし書中には嫌疑が晴れたとあったため大いに安堵し、急ぎ慶賀の返信を認め、翌々日に菱形生に託している。この点から4月初には帰関、通常業務に復したものと考えられる。

年次	事項	出典
文政11年 5月29日	肥後藩士野口儀平律兵衛の当直医として、蘭館にあるシーボルトの指示を仰ぎつつ、青囊堂（吉雄塾）で徹背看病にあたる。	『シーボルト治療日記』
文政11年秋	長崎を離れ、帰郷の途に着く。	『欽斎日暦』3
文政11年 8月9日	シーボルト事件の発端となる「子の年の大風」襲来。九州北部～関門地方にかけて被害甚大。	淡窓日記その他
文政12年	下関に寄寓開業し、蘭医塾を主宰する。	『岡常用方』自序
文政12年 3月2日～27日	長崎奉行所より禁書（『三山論学記』）所持及び譲渡の嫌疑で召喚され、急度叱となる。	『犯科帳』106
文政12年 4月4日	賀来左一郎、長崎より帰郷の途次、研介の書を宜園に持参、淡窓は研介の放免を知る。	『欽斎日暦』3
文政12年 4月6日	淡窓師、門生菱形真澄（下関・亀山八幡社家）の帰郷に際し、在関研介に書簡を託す。	同上
文政12年 8月16日	菱形生の帰郷に際し、岡研介、福原伯亮宛書簡を託し、あわせて研介には草稿を包む。	『欽斎日暦』4
文政13年 正月18日	淡窓師、11月1日付の研介書簡へ返信する。研介からは、蘭人一件の終息、門弟20人を擁する医塾の盛況、さらには今春上坂の予定等を告げられていた。	『広瀬淡窓旭莊書翰集』前篇2
文政13年 2月16～18日	長崎よりの帰途、日目に淡窓師を訪ね、再度上坂の意を語る。これが両者の遠別となる。	『欽斎日暦』5
文政13年 2月27日	離関を3月4～5日に予定していたところ、佐甲家の小児が疱瘡を病み、重症となったため、延期せざるを得なくなったとの書簡を萩の豪商で親友の熊谷五右衛門（鳳辺）に送る。	蘭学資料研究会 研究報告152
文政13年 3月26日	三田尻で熊谷氏の来臨を4、5日待ったが会うことができず、大いに落胆する。さらに商用で下松へ来ることを聞き、平生か室積での再会をぜひとも期待する旨の書を萩へ送る。	同上
文政13年 3月28日	平生より乗船して広島に向かう予定日とした。既に門人を先発させており、芸州で合流する手はずであった。ただし予定は変更され、平生に長期滞在した後、上坂したようである。	同上
文政13年夏	『生機論』なる。	『生機論』題辭
文政13年秋	郷里平生で藤保高（未詳）の後裔に滞留し、古刹般若寺に遊び、「般若寺記」を書く。	「般若寺記」
文政13年 8月22日	在坂研介に宛てた美濃大垣・江馬春齡よりの書簡（8月17日付）に返信する。舎弟元齡の入門を謝し、育成に尽力する旨を誓う。	『江馬家来簡集』28

(2) 下関における事績 I — 蘭医塾の開設

(a) 下関開塾と市宰・中川鯉淵の協力

研介が下関に寄寓開業したのは、文政12年春～同13年3月にかけての約1年間の出来事であった。この期間の動静を述べた資料は極めて少ないが、だからといって手がかりとなる記事が全くないというわけでもない。

『雑記』には「一生六大変」と題された覚書がある。第一＝周防大島小松の母方の祖母に預けられたこと、第二＝俗字師への従学、第三＝漢字師への従学、第四＝他邦での医学修業、第五＝開業による自立、第六＝結婚、の順となっている。各々について年次、関係者等が記され、研介の履歴研究には不可欠の内容を提供する。研介は大坂親迎を33歳とするから、斎藤方策の娘ツルを娶っ

たのは天保2年となる。このうち「十九歳第五生変」の条下には、以下のことが書かれてある。

萩においては則ち初め一僕或は一童同居す。赤関においては則ち忠なる門人或は学僕同居す。大坂においては則ち後に妻孥、門人、僕、同居す¹⁸⁾。

ここで見逃してはならないのは、萩の研介が零細に医業を展開していたのに比べ、下関では複数の門人・学僕を抱え、業態の拡充が指摘できる点である。つまりこの記述に従えば、滞関中は開業に付随して医塾が経営され、そこで門弟に医学を講義し、初の医育事業に取り組んでいた可能性が浮上することになる。

この点は長府藩士・中川清左衛門(馬廻、百七十石)の遺稿『中川涼斎詩藁』に事実を裏づける記事がある。涼斎は致仕後の号、むしろ鯉淵で知られた藩内随一の文雅者である。涼斎は天保2年3月15日～6月1日にかけて、京坂から伊勢を旅行し、先祖の戦跡を訪ね、知友と旧交を温めたが、そのなかに研介も含まれていた。紀行文の体裁をとる「瘦筇」の3月27日の条には次の一節がある。

哺時、小竹と共に岡研海の宅に至る。研海、周防平生の産。嘗て前筑の南溟堂に到り、儒を学ぶ。後、長崎の吉雄氏及び西洋人某に随ひ、西洋学を修む。其の学大成し、近年、赤間関に在って生徒を教育す。時に余、馬関に宰たり。故に結べり。三年前、浪華に來り、門戸を張る。近ごろ屋を築いて甚だ高し。内を迎ふ。内も亦美なり(齊藤氏)。乃ち酒を命じ、魚鮓を饗す。¹⁹⁾

4月には東上途中の戸塚静海が訪問²⁰⁾、この頃が在坂研介にとっての至福期であった。上掲の記事により研介が下関で医塾を開き、西洋医学を生徒に教授していたことが確定する。

涼斎は文政6年9月27日～同12年10月21日まで赤間関在番の職にあり²¹⁾、善政を布いて領民に敬慕された²²⁾。また長府詩壇にも重きをなし、在関中は広江殿峰の随風吟社の人々と韻事を楽し

んだ。殿峰・秋水父子は詩、書、篆刻に通じた風流人であり、山陽との雅交が有名であるが、長崎へ蘭方修業に下る医家を積極的に歓待した富商としても記憶しておきたい²³⁾。研介終生の知己・坪井信道も寄留中、殿峰と詩酒応酬したが²⁴⁾、研介の来関時、殿峰はすでに亡く、宜園一流の詩家研介と交際したのは秋水と思われ、蘭医研介、市宰涼斎の三者が親交を結ぶには時間を要さなかったであろう。秋水は山口行齋の追悼詩を作り²⁵⁾、六子の半数が医家となった。四男春齋は小倉藩医・西元礼に蘭方を学び、五男力四郎は陸奥棚倉藩医の養子となり、上田元泰と改名した。これらの事実から寄寓蘭医と広江家の活発な交流及びその影響がうかがえるかと思う。

研介はときの市宰・中川涼斎の知遇をえて、流寓医師の脆弱な立場を安定させた。広江家等の親蘭派富商が信頼を寄せた理由のひとつがこの涼斎の後見にあり、医塾経営が成功した遠因でもあった。市政トップに著名な仁厚の雅士が在任していた点は新参蘭医の研介に大いに幸いし、また涼斎側も民益の増進を期待して診療と医育が円滑に進むよう種々の便宜を恵与し、支援を惜しかなかったのである。

(b) 医塾名の再考——万松精舎と生菴塾規

研介が岩国で「万松精舎」という塾を開き、「生菴塾規」を作ったとするのは横山以来の通説である²⁶⁾。だがこれは正しい理解ではない。本節では大正期以来、盲信され続けて来た横山説の誤りを訂し、真説を提示したいと思う。

帰郷療養中とはいえ、研介の蘭方医術に対する世評は高く、医学振興に熱心であった岩国藩は急ぎ招聘の準備に取りかかった。岡泰純・泰安父子は仁和寺宮家からともに法眼、法橋位を賜っていたが、岩国領の在郷医としては浪人格医師に過ぎなかった。藩は研介を父兄よりも重く処遇し、天保3年3月7日には歳元支配医師、翌4年正月13日には御家人医師に昇格させ、手廻組に編入して十五人扶持を与えた²⁷⁾。だが本人はこの抜擢をあまり歓迎していない。「脚氣論」によると、研介は病気を理由に再三辞退したが許されず、やむな

く平生から岩国に赴き、藩主拝診のためしばらく滞在した。短期間にも関わらず、蘭方の名医との評判に治を乞うものはおびただしく、君家以下、諸士とその家族、商農を含め数百人を診療したという²⁸⁾。まずこれが病身の研介に大きな負担となった。また武家社会の複雑なしきたりや人間関係にも心身を勞し、ついに病状が悪化、「岩国に病を養ひ、書を万松精舎に読む」²⁹⁾という事態へと追込まれたのである。天保3年11月20日には、病氣療養中の代診を弟子にさせたい旨の届けが藩府に受理される³⁰⁾から、夏秋の候には加療を必要とする状態となっていたらしい。

通説ではこの「万松精舎」を研介が岩国に開いた塾の名とするのである。確かに精舎には生徒を教授する学校、学舎の意味もあるが、本件に限っては全くの誤解という他はない。

研介は天保6～7年にも岩国に行くが、そのときは藩医の桑原太淳邸や妹サトの嫁ぎ先の水谷松茂宅に滞在した。しかし初期には、この万松精舎を宿所としたのではないかと思うのである。研介の『草稿』中に「万松精舎読書」と題する連作詩がある³¹⁾。31篇の大半に仏語が含まれ、仏教思想の影響が顕著である。「精舎」を寺院と見る根拠のひとつがこの点にある。事実、岩国藩五ヶ寺の筆頭・横山寺谷の洞泉寺（曹洞宗）は来藩者の宿坊として利用され³²⁾、通りを隔てた真向いに万松庵という塔頭を所有した³³⁾。『雑記』には寺名が散見し、「洞泉寺の犬は水死を患ふ」³⁴⁾などという自身の生活体験がなければ書けない記事もある。また天保9年3月17日には、洞泉寺住職の立大字禅が柳井講業の折、平生まで足をのばして研介を訪ねている³⁵⁾から、両者が旧知の間柄にあったことを知る。これらの事実を視野に入れて論ずれば、研介は岩国に招かれた際、洞泉寺塔頭のひとつ万松庵に寄宿し、引き続き同庵で療養したと判断される。

寺院名を塾名と取り違えた理由であるが、これは恐らく『雑録』中の挿入位置が関わるかと思う。自筆稿は多く反古であり、後裔はそれらを無作為に重ねたと見え、厳密に年次順に配列されていない。その点を考慮せず、後に独立して『万松精

舎読書』となる草稿の直後に「生莽塾規」が綴じられ、ここに偶々「岩国」「精舎」「塾規」が揃ったことから、ついに錯誤が生じたものと考えられる³⁶⁾。

万松精舎が寄寓先の寺院名と判明した結果、塾規に冠する「生莽塾」こそが正しい塾名であったと結論される。では所在地はどこであったか。著述の項で触れる『岡常用方』自序には「周防／生菴／岡研子究著」と署名がある。本書は門弟の求めに応じて編述され、下関の薬室に常備された西洋処方書であるから、生菴は在関期に使用された庵号であった。また『雑記』中に「生莽自記」と書し、下に「研介、生機を論じて小稿を著すに生莽と号す」³⁷⁾と由来を説明する点は特に注目される。なお「莽」は「菴」の異体字に他ならず、「庵」と全く同義である。「小稿」とは本邦における西洋生理学書の嚆矢『生機論』を指す。つまり、生菴とは下関で進められた『生機論』の訳述作業にちなむ号だったのである。この点が判明したことで、「生莽塾規」は下関に創設された生莽塾の塾則であったと確定する。

下関開塾説の正当性を補強する条項は塾規中にも存在する。ひとつは医学専修でも広く自然科学を学ぶことの大切さを説いた第五条である。研介は理学六分科説（『天造堂漫筆』³⁸⁾、泰西理科三分説（『西説会談引』³⁹⁾）を紹介し、医学教育における理学の重視（『周礼医師職鈔解』⁴⁰⁾）を提唱した。この考えは下関における講学姿勢にも反映し、それは当地で脱稿された『生機論』の訳述動機（蘭学不熟の門弟の理解を助けるため）にも鮮明である。蘭書の和訳テキスト化は理学重視の持論を実践に移した行為であり、研介の優れた教育者の資質を示すと同時に、初の門人育成に挑む意気込みを表わしたものと見えよう。

さらに第十条には「酒樓、茶店、妓館に遊ぶを禁ず」⁴¹⁾とあるが、これは一般論でも、岩国城下の話でもない。本条は西国有数の遊郭のあった下関を前提にしてこそ説得力を増す訓戒となる。友人・中村文杏（三田尻の人）が長崎丸山で遊蕩に耽り、金を使い果たして自刃した事件（文政11年6月）⁴²⁾の記憶もまだ生々しく残っていたはず

で、類似の施設をもつ海港下関に医育を開始した研介にとって、この方面は特別に警戒すべき問題であった。

研介が下関に生葺塾を主宰したのと同じ年、親友坪井信道も江戸深川に蘭学塾安懷堂を創設した。文政12年は東西蘭学を隆盛に導く原点の年として、医学史上に銘記されてよい。

(c) 「生葺塾」の位置・規模・門人

研介の生葺塾が下関のどの辺りに位置したかは、現時点では把握できていない。しかし市街東域の亀山下(阿弥陀寺町)には、同門の蘭医山行齋が早くに来関して地域の信頼をえており⁴³⁾、加えて各々の庇護者で「東の伊藤」「西の佐甲」と並称された下関の大年寄両家との関係も考慮すべきである。当時、山行齋-伊藤杵之允、岡研介-左甲甚右衛門という後援の構図が確立しており、研介はおそらく本関の西部で開塾したものと推測される。

次に生葺塾がどれほどの規模であったかについては、淡窓師の手紙で知ることができる。それは研介の親友恒遠頼母が持参した11月1日付書簡への返信で、全四条からなる。第三は詩集出版への周旋依頼、第四は旭荘が近々結婚するとの報知である。第一、二条については肝心の部分であるから以下に示そう。

- 一、当時御教校門人も二十人程も御座候由、不堪欣然候。当春ハ浪華御出張の由、何卒御努力可被下候。
- 一、蘭人一件も一切片付キ、至而事情軽く聞へ大慶存候。蘭学衰微之端ニハ相成申間敷ヤト大に致懸念候処、安心之至候。⁴⁴⁾

年次はなく、ただ正月18日とのみ記す。小野精一は在坂研介宛とする⁴⁵⁾が誤解である。「蘭人一件」がシーボルト事件を指すことは喋々するまでもない。国外追放となったシーボルトの離日は文政12年7月23日であり、一応事件の終結を意味する出来事であった。よって研介書簡は文政12年11月1日、淡窓書簡が翌13年1月18日と

なる。また「当春ハ浪華出張の由」とあるからには、現段階ではまだ上坂しておらず、他所にいたことは自明である。後述の熊谷五右衛門宛書簡は同年3月半ばまでの研介滞関を実証しており、本信の送付先は下関であったと断言される。従って淡窓が門人20余が出来たことを慶賀した研介塾は、文政末に下関に誕生した生葺塾を指していると考えなければならない。

ところで研介の門人は相当数あったはずである。大坂では江馬元齡(大垣)⁴⁶⁾、福間長安(熊本)⁴⁷⁾、豊田九阜(日出)⁴⁸⁾が確認される。在関期の門弟を書き残した資料はないが、先述の研介代診の一件では、坂本周鼎、河村貫之、藤山貫道という3人の弟子の名が上がり、岩国時代に力量ある門人たちが随従していたことが分かる⁴⁹⁾。筆頭門生の坂本周鼎は豊後日出の人、後に大坂平野町に開業、天保15年~嘉永2年まで大坂医師番付の上位に掲載される流行家となった⁵⁰⁾。幕末に日出藩医として厚遇された勝田安石も一時研介に師事した⁵¹⁾。

上記の日出三医はみな帆門で、帆足万里と勝田季鳳が研介の友人であった関係からの入門であろう⁵²⁾。研介が代診に立てた3人の門弟が、早くから従学し、信頼をえていた点は確かで、下関時代に「忠門人」と称され、研介上坂に際し広島へ先行した弟子は彼らであった公算が強い。周鼎と貫道は上坂して齋藤良策(方策男)を訪ね、研介の近況を報じたが⁵³⁾、帰郷後は師の猜疑の対象となり⁵⁴⁾、師弟関係が険悪化、最終的には師のもとを去ったようである。

(3) 下関における事績Ⅱ——著訳書の撰述

(a) 『岡常用方』自序の重要性

研介の著訳書は多数あったとされるが、散逸したものが多⁵⁵⁾。今日見ることができるのは全て自筆稿本として伝わる貴重なものばかりである。また『西洋灌腸録』、『眼科精要』等は書名のみが確認されるいわゆる存目書であるが、このうち『岡常用方』については、不完全ながらも山口県立文書館に写本が所蔵されている。書体は研介とも、旧蔵者の吉田祥朔とも一致せず、いつ頃、誰

の手によって筆写されたものか判らず、吉田がどうやって入手したかという経緯も示されていない。

冊子は19丁（半丁9行）の途中で不自然に終了し、残り31丁が白紙であるから、完本と見ることはできず、一部を書写したに過ぎない。処方
は発表=五方、壮神=五方、利膈=四方、健胃=四方、瀉膽=三方、掃腸=二方、調宮=二方、達
脮=二方の計二十七方が掲載されている。西洋薬
は、加蜜列、瓦刺蘇、墨栗薩、若格実温、撒爾非
亞、珊篤里、葛爾儒、麻屈涅私亜、斯哥而宿業
刺、栗斂斯舍利別、亜私百爾弟、ラフダニューム、
サフラン等が見られ、音写漢字の大半にはルビが
付されている。本文も「シケウル失苟兒陪屈」、「シンキンゲン聖京健」
等の蘭語を交えて構成され、少しでも蘭方の術語
に慣れさせようとする研介師の教育的配慮がうか
がえる。また欄外には代用となる和漢の薬種が若
干ながら注記されている。

冒頭には181字に及ぶ自序が置かれており、いまこれを訓読すると次のようになる。

文政己丑、余、赤関に寓し、諸々を延きて社を
結び、以て医学を講じ、傍ら患者を診る。調剤
の際、諸生、未だ東西を弁ぜざる者有り。亡羊
迷惑して手を着ける所無し。乃ち余に常に用ふ
所の方を集め、性功主治及び藥品去加の略を
附し、諸を薬室に置かんことを請ふ。余是に於
て此の編を撰次し、其の方は之を西書に本づき
採り、問々古人配合の意を酌み、以て之を損益
する者も亦之を載す。其の方名、或ひは旧を存
し、或ひは之を改め、而して其の方を命ずるに
或ひは性功を以てし、或ひは主功を身体諸部及
び疾病に配する者は、専ら簡便を以て急と為
し、其の名に因って其の用を識らしむるを要と
するなり。若し夫れ方剤使用の妙と、薬味の去
加、分両増減の詳ともて、機に臨んで変に応ず
れば、各々活法有って、其の人を存せん。此の
編、能く尽くす所に非ざるなり。⁵⁶⁾

研介の下関寄寓の年次及び医塾開設の事実は、これによって初めて特定されるのである。

本書は現段階において近世下関で執筆が確認される唯一の蘭方書である。本書の存在は地方学術史上においてははすこぶる価値ある著作と評価される。だが内容は一般的蘭薬を主とする簡便な処方書であり、際立った特徴や配剤の独自性は見られず、あくまで門人教育を優先した初学者向けの基礎編といえる。その点からいうと、付載された自序のほうがより有益な医史上の情報をもたらしており、本体に勝る価値をもつといっても過言ではない。

以上の考察で『岡常用方』の下関誕生の真相が了解されたと思う。だがそのいっぽうで『生機論』の下関訳述説についてはやや論拠薄弱の感がある。そこで再びこの問題を取り上げ、今度は『生機論』本体に手がかりを求めつつ、慎重に分析を進めて行くこととする。

(b) 『生機論』——自署「研海」の含意

従来の研究では、研介には初期の周東、発病後の耻庵、それに万松精舎の堂号があったとされるが、生菴の存在は知られていなかった。なお万松精舎は堂号ではなく、研介が寄寓した岩国の寺院名であることは前述の通りで、堂号は天造堂が正しいことを付言しておく。

ところが肝心の『生機論』には生菴を用いず、題辞には「研海愚者」と署名する。一部にこれを介字の誤りとする説もある⁵⁷⁾が、自筆ゆえ成立しない。前引の『中川涼斎詩稟』が「研海」、斎藤良策書簡も「研海先生」⁵⁸⁾とするから、「研介」と「研海」は併用されていたのである。筆者は両号が明確な意図のもとに使い分けられたと想定しており、これが訳述地を決定する有力な証拠となると見ている。

字音の上から「研」は「硯」と相通じ、ともに磨墨の滑石を指す。従って「研海」は「硯海」に等しく、これを普通名詞として用いた場合、すずりて水を溜める窪んだ部位、すなわち墨池をいうことになる。ところが本邦では固有名詞としての用法があり、それは中世以来、詩歌の世界に関門海峡の雅称として定着したものであった。一般には「硯海」と表記するが、実際には「研海」も用

いられていた。例えば橋文龍が広江殿峰に送った七絶には「研海の浜に蒔草秀づ」とあり⁵⁹⁾、また幕末の中島棕隠『金帚集』(巻5)の「六月朔、再び赤間関を過ぎり、広江大車の椋月楼に宿り、寓感を示す」(第2首)にも「聞くに飽きたり研海の旧書楼」との使用が確認される⁶⁰⁾。

『生機論』に「生菴」を用いなかった理由は、単に書名との重複を避けたためであろう。これを「研海」に代えたのは、通称と同音で、しかもそれが寄寓地下関の雅称であったという点に尽きる。研介の生涯にとって下関は特別な意味をもつ。すなわち当地は長崎遊学後の最初の開業開塾の地であり、ここで誠実な門人と有力な支援者に恵まれたことが彼を蘭学者・蘭医家として成長させ、上坂への自信を与えることとなった。「硯海」の号はこういった下関の人々と土地に対する愛着や謝恩の思いが投影された筆名であったといえよう。

高野長英との共訳『蘭説養生録』は日本初の西洋養生学書として名高く、また『生機論』も我が国で翻訳された生機論の生理学書の嚆矢として重視される。本書が下関で大半が書かれたと見る根拠は他にもある。題辞「生機論の首に題す」を書き下すと次のようになる。

生なる者は云ひ難し。而して言ふ者は知らざるなりと。西人は実測を喜び、造化の玄門に入り、万物の妙機を窺ふ。其の生理に於て為さざる所無し。余已に西説を修め、門生の為に之を云ふ。人必ず之を笑ひて、言ふ者は知らずと曰んか。余は乃ち曰ん、笑はれずんば則ち以て道を為むるに足らざるなりと。且らく之を鴻濛に問はん。

文政庚寅夏月 研海愚者 岡研識⁶¹⁾

若くして『老子註』を著した研介らしく、文中には『老子』の字句が多用され、しかも老子に特有の逆説的論法を用いて、俗見に迎合せず、実証重視の姿勢を貫いて真理を探究すべきことを強い口調で訴えている。また「門生の為に之を云ふ」とあるので、生理学を門弟に講義していた事実も判明する。それがどこで行なわれたかは、『生機論』の署名「研海」が下関を指し、門人が同居し

た初の開塾地も当地であった点からすれば、講義地はおのずと下関の生菴塾であったと特定される。

すぐ後に続く「凡例六則」中の第一には、「西医の学、近世に至り、頗る其の精を極め、生機の説のごときも亦甚だ旧套を異にす。余、講習の次、衆説を取捨し、随って之を筆し、且つ自製図を附し、蒙生をして先づ其の大概を知らしめんと欲す。是れ講論の本旨に於て実に千百中の一二を挙ぐるのみ。自余の諸説は継いで当に刻に授くべし⁶²⁾と見え、本書が初学者を対象に編次された教本であったと知られる。原装表紙に「未だ稿を定めざれば忠信無きの人に示すを許さず⁶³⁾と書かれている点は、本書が生菴塾に常置され、新医学修得に真摯に向き合う受講生たちに筆写を許し、それをテキストとして生理学の講義を行なったことを意味しよう。『生機論』は下関で入門した蘭学初心者を念頭において書かれたのであり、執筆意図は『岡常用方』と共通する。つまり両書は学生本位の立場で学問理解を第一とし、導入段階での適切な解説書、手引書の準備が効果的とする研介の教育観を具現化した著作だったのである。下関の生菴塾は塾主研介の医育への熱意と優れた見識が学生を魅了し、初学に配慮された『岡常用方』と『生機論』を備えることで、将来有望な地方蘭学塾の雄として高く評価される存在となった。

文政12~13年3月中旬までの下関寄寓中、岡研介は西洋処方書『岡常用方』のみならず、本邦初の西洋生理学の翻訳書となる『生機論』の訳述にも取り組み、初稿を完成させていた。題辞は「夏月」とあるため、離関後の平生帰郷時に書かれたようである。なお天理本より一章一図多い写本の伝存を不可解とする意見もある⁶⁴⁾が、これは凡例にいう通り、増補作業を経た上坂後の加筆本と推測される。

(4) 研介来関の背景——「利」と「縁」

(a) 近世医事史上における下関の特性

ここまでは主に研介の生涯における下関時代の意義を問い、生存形態の実相を解明した。本節で

は下関という外部環境との関係性に視点を移し、研介の当地開業・開塾の背景を「利」と「縁」をキーワードとして、地域特性と人的交渉の面から来関事情を考察する。その上で下関蘭学史上に研介の位置を考えたい。

まず「利」の方面から論及しよう。研介の来関は衝動的、偶発的行動ではなく、近世下関のもつ医史上の特性をふまえ、十分な情報と展望下に計画的に実行されたものであった。

下関は古来、海陸交通の要衝として衆人往還の地であった。さらに近世後期に商品経済が著しい発展を示し、輸送手段としての航路整備が進んでからはいっそうの経済的繁栄をとげ、商客や船舶関係の寄留者も激増した。当地は他の寄港地と異なり、内外航路の分岐点、本州・九州の境界という重要な地勢の条件を備え、従って長期滞在者も多く、保養拠点化が促進され、医家需要も高まりを見せた⁶⁵。海港下関が有した医事史上の第一の特性は、他所流入の新規開業医が収入をえやすい環境を備えていた点である。文政元年に来関開業した坪井信道は1年半で1,500人を診療、蓄金ができるとすぐ江戸に向かった⁶⁶が、この話は下関の対医家扶養力の優秀性を示し、後日の雄飛に必要な資金調達が短期間に実現可能な港市であった事実を客観的に証明している。

信道の事例には、医事史上における下関の第二の特性が包含されていることも見逃せない。それは長崎遊学を終えた新進の蘭医や上昇志向の強い西国医家の多くが、下関を試行開業の地に定めた点である。彼らは京坂や江戸での本開業前に一度本州西端の商都で感触をつかみ、職業人としての技量を磨いてから東上する手順をふむことがしばしばであった。下関は遊学・開業の資金捻出もでき、かつ実務的シミュレーションを行なうにも格好の規模と立地条件を備える都市とみなされていたのである。この点は下関が商品流通や商業上に果たした役割に酷似し、当地は医材という人的資源の一時的集荷地であって、これを各地に分配供給する中継基地としての機能を担ったといえる。下関寄寓をへて三都開業に転じた代表的蘭医に石原柳庵と尾崎秀民⁶⁷があり、坪井信道、山口行齋

(上坂準備中急逝)、岡研介も同様である。このような国内でも類例のない下関の特殊な位置を意識せぬ医家はなく、研介もこの点をメリットと十分に承知して下関開業を決意したものと考えられる。

下関での蘭方開業の利点として、もうひとつ付け加えたいのは、当地では蘭方受容への抵抗がほとんど見られなかったという点である。これは18世紀後半に永富独嘯庵、香取太華という親蘭系の二大古方医が登場し⁶⁸、その影響下に早くから西洋医学受容の基盤が整備されたことに関係しようが、もっと古層の外来文化受容の歴史に目を向ける必要がある。

大内時代の下関は防長における大陸文化輸入の窓口として栄え、その頃から外来文化を歓迎する風潮が顕著であった。江戸時代も朝鮮通信使と蘭使の留宿地に指定され、また長崎修学者の往来寄宿も頻繁で、過去の進取的気質とあいまって、舶来の学術・文物を愛好する文化的土壌は十分に保持されていた。岡研介や山口行齋ら流寓蘭医が次々と順調に開業できたのは、この長い歴史のなかで培われた下関独特の開明性や外来文化に対する嗜好性が少なからず影響していると思われる。

しかし、研介の寄寓要因はこういった地域特性の問題だけで片づけられるものではない。実はここに下関のある有力親蘭家との予想もしなかった地縁的結合が指摘できるのであり、その関係性を排除して来関の動機を考察することは不可能に近い。これが筆者のいう「縁」の方面であり、むしろ「利」よりも優先度・影響力の高い事情であったと考えられる。

(b) 親蘭派大年寄佐甲家との縁類関係

下関は蘭使の宿泊地であり、歴代の使節は東西の本陣に交互に滞在するのを慣例とした。和蘭宿をつとめた両本陣は伊藤家と佐甲家で、ことに前者は親蘭家として有名であり、高野長英⁶⁹、戸塚静海⁷⁰も東帰の際に立ち寄っている。

文政9年、シーボルト参府時の宿所は佐甲家が担当した。22代当主・佐甲甚右衛門(宗敏、?-1843)は娘婿の清之進(宗勝、1798-1828)とともに歓迎に努めた。3年後の研介来関にあたり、

重要なキーパーソンとなったのが、この佐甲宗勝である。

佐甲家は中世以来の旧家で、地役人であると同時に薩摩藩や加賀藩等の有力大家の御用達として、当地の経済界に大きな影響力を持つ富商でもあった⁷¹⁾。宗敏には男子がなく、次女に婿を取って後嗣とした。これが宗勝であり、周防平生の井上軌周の次男であった⁷²⁾。初め宗勝は落合忠覧の養子となっていたが不縁で実家に戻され、次いで佐甲家に迎えられた。これ以後、井上・佐甲の両家は急速に接近し、明治期まで強固な姻戚関係を維持した。

宗勝はシーボルト来関の翌々年(文政11年9月29日)、家督を相続せぬまま31歳で短逝、一子宗愛が嫡孫として祖父宗敏から23代当主の座を譲られた。宗愛の妻リウも井上家の出身(父宗勝の兄義辰の四女)であった。明治の当主伊三郎も義辰の長男信敬の三女ヲヲを娶る。つまり幕末維新の佐甲家は井上家の存在を抜きにして語ることができないのである。宗愛・リウ夫妻の代に井上の血統は佐甲を上回るが、伊三郎の代で完全に入れ替わる点はいよいよ驚愕に値する。当然ながら平生の実家は佐甲家政に影響力を行使し、両家は政治的、経済的に連携を深め、一蓮托生の関係となって家運興隆の方途を模索した。

井上氏の先祖はもと吉川家の重臣であったが、大野毛利(萩藩一門家老)創家に当り、庶流の信詮(祐庵)が聘せられて平生に移住した。これが平生井上家の初代となる。しかし次の信全はゆえあって浪人、下関に流寓して吉文字屋某(商家)の娘と結婚、16年後に平生に戻ったというから、下関と井上家のつながりは元文~宝暦時代にまでさかのぼる。

佐甲宗勝の実父四代軌周は、柳井沖の領境争論に調停役をつとめ、開作事業を完遂させ、その勤功と往時家筋の儀により再度士分に取り立てられた。以来、当主は扶持を賜り、岩国領堅ヶ浜新市裏町にあって人材を輩出した。幕末に活躍した信厚は防長四陪臣のひとり秋良敦之助(萩藩寄組土浦氏家老)の女を娶り、維新後は村会議長、県会議員等を歴任、政治家として地方の発展に尽力、

また佐甲家の親族代表の立場からよくこれをもり立てた⁷³⁾。長男岩太郎は平生の金融・経済界をリードし、三男禧之助も高名な地質学者として満州工科大学長の要職にあった。このように井上家は平生の素封家、名士であり、佐甲家の縁組先としては、まず均衡の取れた家格といえた。

さてすでに何度か記したが、研介もまた平生新市の出身であった。『雑記』には方々に親姻・縁者と思われる各家に関する記録が散見し、新市では弘津(平野屋)、坂(新屋)、井上(平生屋)、林(播磨屋)の四家と親密な関係が認められる⁷⁴⁾。このうち坂家は研介の母方の親族にあたる⁷⁵⁾。研介の姉タメは田布施の坂楠左衛門に嫁した⁷⁶⁾が、これも平生の坂氏と同族であろう。いっぽう井上軌周の弟清信は坂新蔵大江邦房の養子となって澄房(軌任)と称した⁷⁷⁾。新市裏町の坂家の文化年間の当主が坂軌邦である点に照らせば、この坂氏は同じ家筋と判断され、岡家と井上家は坂家を介して縁戚関係にあったことが証明できる。上掲の各家は新市裏町という在郷町でごく近隣に所在し、日常的交際が展開した地域共同体の構成員であったといえる。知識階層に属した法眼岡家と富商井上家はともに士格をもち、医・商・文の三事を接点に信頼関係が築かれ、相互扶助の体制が確立していたと考えられる。

さらに注目すべきは、佐甲家の養子となった井上宗勝が寛政10年、研介が11年の生まれであったという点である。両者はわずかに1歳差で、近所に竹馬の友として成長した可能性が高い。宗勝は文政11年9月に逝去し、研介はそれから半年もたたぬうちに来関した。しかもそこには旧友の忘れ形見が残されていた。この現実に接するとき、宗勝の死と研介の下関寄寓という2つの出来事は、不可分の関係にあったと考えざるをえない。研介が旧友の早すぎる死を嘆き、宗愛に深い憐憫の情を抱いたことは察するに余りあり、進んで幼なじみの遺児育成に関わろうと誓ったろう。年少の宗愛は祖父宗敏の後見下に吏・商の実務を中心に学びつつあったと思われるが、漢学もできた研介に祖父が経史の個人教授を要請したとしても何ら不思議はない。真相がどうであるにせよ、研介

の来関はこの佐甲家との関係解明が大きな鍵を握る。

現在、両者の交渉をうかがうに足る新資料は発見できていない。ただ田中助一が紹介した萩の熊谷家に伝わる研介の手紙2通にわずかながら関連記事が見られ、これが幸いにも極めて資料的価値の高い内容を有している。

1点は文政10年と推定される8月28日付書簡であり、そこには次の一節がある。内容は長崎から蘭薬（マグネシア、ジキターリス等）を送ったが、シーボルト流の薬物が高騰して入手困難になっているから大切に使用せよと伝え、さらに「先便舎弟ト下関迄書状相託し候。中風説書等、相添候へ共、未相届候由、佐甲□は滞りは不仕候哉。併其後相届□候様も知不申候」⁷⁸⁾と述べ、ここに佐甲家が登場する。このとき研介は長崎にあった。舎弟は岡数馬（泰純六男）、後の小内玄恭（大野毛利家侍医）である。書状その他を弟に託して下関まで届けさせたが、まだ到着していなければ佐甲家で荷が滞っている可能性があるとして指摘している。この内容によって下関の佐甲家が研介に萩と長崎の交易品輸送の中継基地として利用されていたことが判明する。

もう1通はより重要な内容を含み、滞関中の研介と佐甲家との日常関係を明示する貴重な書状である。これも年次は不明であり、ただ2月27日とだけ記載する。このとき研介は荷作りの際に持て余したフラスコを鳳辺に恵贈しているが、上坂に向けての身辺整理もほぼ完了し、離関のときは刻々と迫っていた。

小子も来月四五日ニ槌発足必仕度候。併佐甲ノ小兒疱瘡ニテ重候へば延引可仕候。薬物ハ珍敷もの大分得手申候。右一寸急便申上度、余は期後便之時候。恐惶謹言。カヤブテー御申越被下候処、只今ハ長崎ハ切レニテ七増も八増も仕候。行齋ニても五増ニは求め候よし。⁷⁹⁾

当初、下関出航は3月4、5日の予定であった。本信は淡窓日記にある上坂の決意報告の話と併読すればよく合致し、3月離関の記述に照らすと、

文政13年春に下関から届いた書簡であることは疑いのない所である。

この年、防長に疱瘡が流行、9月には前萩藩主毛利斉元の長男猷之進（後の敬親、12歳）も罹患した⁸⁰⁾。敬親は侍医団の手厚い治療で回復したが、佐甲家の子供（宗勝の長女スガカ）は難症を示し、およそ助かる見込みはなかった。にも関わらず、研介は待望の上坂を遅らせてまで眼前の幼い命に向き合うことを選んだ。それは報恩と同時に医師としての強い責任感・使命感に裏打ちされた行動であり、謹厳慎重と評される人柄⁸¹⁾をみごとに反映する。おそらく研介は故宗勝との縁類関係から佐甲氏に招かれ、大年寄家の御抱蘭医として家庭医をつとめ、あわせて本陣付医師のごとき立場をも委任され、家人及び滞在士家の健康管理や疾病治療に携わったものと見られる。

また本信は同門の山口行齋との交流を明示する点からも重視すべき書信である。行齋は文政3年、長崎からの帰途、当地に立ち寄り、伊藤奎之允の支援で開業、大いに繁盛して門弟多数を擁した⁸²⁾が、在関中の研介との交渉は不明であった。しかし、この記述から蘭医としての情報交換が活発になされ、基本的に共存共栄の道を歩んでいたことが実証されよう。

研介の下関開業を実現させた最大の功労者は、以上の経緯から考えて大年寄の佐甲家であったと結論されるが、他に複数の協力者があったことも否定できない。残念ながらその点を記した資料も発見できておらず、推論の域を出るものではないが、在関町医の竜虎として後に長府藩医に登用された福原伯亮（仙庵）と石井節哉（宗潤）が、何らかの形で関与していたことはまず間違いあるまい。福原伯亮は当地から日田に遊学した最初の人物として知られ、下関宜園派の盟主的存在であった。また石井節哉は蘭方に深い関心を寄せ、戸塚静海、松本壽庵ら中央・地方の一流蘭医と親交を保ち、子息行蔵（信一、赤間関医学所第二代校長）を適塾に学ばせた在関親蘭派の有力医家であった。両者は研介が下関で開業・開塾するにあたり、協力を惜しまなかったと見られるが、前述の通り資料的裏づけが取れないため、従って現段階

で実証できるのは、本節に述べた海港下関がもつ開業時の複数の利点と、研介と佐甲家が縁族であったという2点に限られる。これこそが研介に下関開業を決意させた最も大きな要因なのである。

(c) 下関蘭学史上における岡研介の位置

本節を終えるにあたり、蘭学者・蘭医家としての岡研介の在関意義を当地蘭学の史的展開のなかに確認しておきたい。「下関蘭学」は筆者の造語であるが、その呼称が過剰な思い入れに根ざす誇張表現でないことは、各節に示した蘭学関連の多様な事象から容易に理解されるはずである。いまそれらを整理すると次のように概括でき、下関蘭学史における研介の位置もおのずとはっきりするかと思う。

下関蘭学の黎明は、香月系の後世方医学が凋落し、山脇・香川系の古方派医学が台頭する過程で訪れた。宝暦頃、長崎の蘭医・吉雄耕牛に学んだ永富独嘯庵は、積極的にオランダ医学の知識吸収に努めた先覚者であり、当地蘭学の始祖となった。また古医方を当地に広めたもうひとりの功労者・香取太華も馬関の医学改革の一翼を担い、蘭方にも深い理解を示した。以後、両人の一族や門弟(小石元俊、亀井南冥、小田濟川、松岡道遠、藤左仲、香取文圭、香取純庵、古谷道庵等)からは漢蘭折衷及び蘭方専修の名医が輩出、長関医界に対する影響は幕末まで持続した。独嘯庵没後の半世紀は、特筆すべき関連事項を見出せないが、この間にも蘭医学は注目の度合を増し、徐々に知識人層に支持を拡大していった。

下関蘭学が急激な発展を見せるのは、化政期に入ってからである。当地には全国各地から長崎遊学を志す医家が立ち寄り、これを支援する富商(小倉屋=河野藤右衛門、伊予屋=広江殿峰等)も現れ、また遊学後に当地で開業する蘭医(山口行齋、石原柳庵等)も増加、下関蘭学は空前の活況を呈するようになる。その発展に決定的影響を与えたのはシーボルトである。シーボルトは文政9年2月22日~3月1日までの滞関中、訪れた旧門人の研究論文を佐甲家で受領し、彼らの同伴し

た多数の患者を連日のように診察、最新の外科的治療を施した。その様子は見学の人人を驚かせ、弟子たちを強く啓発した。本件を通じて西洋医学への信頼は絶大なものとなり、下関地方に蘭学摂取の気運が醸成され、当地医家の蘭学志向は一挙に高まった⁸³⁾。この蘭学熱の沸騰に呼応したのが研介である。下関における蘭学受容の地域的基盤の成熟は、新規開業や蘭学塾開設を促す大きな要因となった。

文政末の下関には2つの蘭医塾が並存した。しかも両塾ともに高い支持を受け、行齋塾は総計200名前後、研介の生莽塾は1年で約20名が入門し、当時の下関は西日本有数の蘭学修業地として賑わいを見せていたのである。しかし、文政13年春に研介が上坂のため離関した結果、生莽塾は閉鎖され、さらに天保3年には行齋も上坂準備中に急逝、医塾は自然消滅する運命をたどった。行齋のパトロン伊藤奎之允が塾生と患者を放置できず、門弟中の適材を後継者にすえ、医塾の存続を訴えて奔走したことが記録に残っているが、周旋は実を結ばなかったようである⁸⁴⁾。

このように文政末~天保初にかけて、下関蘭学は極盛期を迎えた。活動成果からいえば、山口行齋、シーボルト、岡研介の三医が主導的役割を果たし、各々がこの期間において当地蘭学の充実-発展-完成の役割を分担したと解釈できる。研介の下関での活動は短期間ながら、生莽塾を主宰、医育と著作の両面に優れた成果を残し、下関蘭学の質的向上に寄与した。ことに医学教育における業績は顕著で、系統的教授法の導入、基礎医学の重視、初学者に対する入門期教育の工夫などは特筆され、厳格な塾規を掲げてこれを実践し、良医育成に情熱を注いだ点は高く評価されなければならない。研介学の遺風は辛うじて生莽塾の高弟・坂本周鼎、藤山貫道らに継承され、上坂した周鼎は緒方洪庵とも親交を結び、立派な流行医に成長した。以上の功業は独嘯庵に比肩しうるもので、研介は下関蘭学史上における中興の祖であったと結論づけられよう。

一時は順調に発展するかに見えた下関蘭学も、指導者の離関や死去により天保初には早くも衰勢

に転じた。その後は弘化頃に蘭学塾の存在が一件確認できるのと⁸⁵⁾、久留米藩の蘭方移入に功績のあった田三畝が嘉永期に寄寓していた⁸⁶⁾という他はさしたる事象もなく、以後、当地蘭学は長く退潮傾向が続く。再び脚光を浴びるのは、研介が離開して30余年後、下関が攘夷・対幕戦の舞台となったときである。我が国初の洋式火砲による負傷者に官民蘭医は組織的に対処した。日本の近代軍陣医学、野戦外科は最前線の当地で幕を開け、急速的發展に至る第一歩を踏み出したのである。

おわりに

冒頭にも述べたが、現在まで岡研介の下関開業に注目し、詳察を加えた論考は出されていない。なかには史実を疑問視する意見もあったかと思われるほど、関係辞典類の大半は本件を載せず、意図的に言及を避けた感すらある⁸⁷⁾。しかし関連資料を綿密に検討した結果、当地で著訳書が執筆され、蘭学塾を主宰していた事実が判明し、これにより研介の生涯はもとより、ひいては日本医学史上における研介在関期の重要性が実証されたと思う。以下、各節で解明したことをふまえて、下関時代の研介の生活痕と業績の要点をまとめて見よう。

岡研介は文政12年初春～13年3月中旬までの約1年を下関で過ごした。その間、長崎に2度出かけた。初回は長崎奉行の召喚に応じたもので、取り調べの結果、禁書所持・譲渡の罪を問われ、吃度叱の処分を受けた。

下関では本関支配の最高責任者・中川清左衛門(鯉淵、涼齋)の知遇をえて開業を有利に運び、大年寄佐甲家からも手厚い庇護を受けた。現当主の実父・故佐甲宗勝は平生の井上家から養子に迎えられた人物であった。井上家は岡家と同じ新市裏町に屋敷を構える研介の母方の縁戚であり、1つ違いの研介と宗勝は竹馬の友であった可能性が高い。当主宗愛の妻も井上家から嫁ぎ、研介来関時の佐甲家は母方の縁族の血が濃厚に入り、研介とも遠縁関係にあった。佐甲家は自派蘭医として旧識の研介を招致、開業・開塾を助勢し、抱医に任じて本陣及び私邸の医務を統括させた。

寄寓中には弟子の懇請により『岡常用方』を著

わし、『生機論』の訳述をも完成させた。他方、医育にも力を注ぎ、蘭学専門の生莽塾を主宰した。すでに寄寓開業していた同門の山口行斎の蘭医塾も盛況であったが、鳴滝塾で塾頭にのぼり、高野長英と才知伯仲した研介の生莽塾は下関初の本格的蘭学塾とあってよく、学業熱心な約20名の門弟が在籍した。講義は系統的、有機的に進められ、西洋医学、蘭語学はもとより生理学等の基礎・補助学問も重視された。これは当時の地方蘭学塾にあっては稀に見る進歩的教育システムであった。

以上のように下関における研介は、医育・研究の双方に顕著な業績をあげ、当地蘭学的發展に貢献した。下関蘭学は文政末に寄寓開業したひとりの著名蘭医・岡研介の活躍によって絶頂期に達したと導論されるのである。

注

- 1) 横山健堂. 人物研究と史論. 蘭学者岡研介. 東京: 金港堂; 1913. p. 618-638
- 2) 呉秀三. 岡研介. 医学及医政 1924; 11(5): 16-23
- 3) 田中助一. 防長医学史. 東京: 聚海書林; 1984復刻. p. 186-192, 463-465
- 4) 三宅紹宣. 蘭医学者岡研介の生涯とその思想. 山口県地方史研究 1973; 29: 20-27
- 5) 岡研介子事蹟志料(山口県立文書館蔵. 吉田樟堂文庫 106). 同冊所収の斎藤良策からの研介宛書簡に「去歳御発病の時氣ニ向候故少々発動致候事も可有之と存居候. 併格別錯乱ニハ不至るよし, 先々安堵仕候」(9月27日付)とあって年次を記さない。しかし同簡には頼山陽の「当月廿三日晩死去」の事実を伝えており、天保3年の発信と判明する。そこから逆算すれば発病は前年の10月頃となるであろう。
- 6) 岡研介自筆稿. 雑記(早稲田大学図書館. 洋学文庫蔵) No. 89. 天保7年秋～歳暮まで岩国の姻戚水谷家に逗留, 昌明館に主公等の出療治に赴いており, 少なくとも翌年は診療活動を認めてよいと思う。なお早大所蔵の研介関連資料はデータベース化を終え, 全文の画像が一般公開されている。本論ではそれらからの引用に限って, PDFファイル番号を用いて該当箇所を示した。
- 7) 注5) 同. 斎藤方策の岡泰安宛書簡に「此間, 萩之書生御尋申候間, 嚮仕候. 右之人も蘭学生ニ御座候処, 上方へ參候とも決而蘭学ハするなどの御咄有之候様子申居候」(年次不明, 2月21日付)とある。
- 8) 雑記. No. 89
- 9) 注2) 同. 17

- 10) 同上. 18
- 11) 呉秀三. シーボルト先生其生涯及功業. 東京: 吐鳳堂; 1926再版(東洋文庫117. p.15)
- 12) 岡研介自筆稿. 雑録(早稲田大学図書館. 洋学文庫蔵) No.103. また雑記. No.39には「居家を以て業を售る. 之を論ずれば, 萩, 赤閑, 大坂, 岩国」との記載がある.
- 13) 日田郡教育会. 増補淡窓全集(中). 広瀬淡窓. 欽斎日曆. 巻3. 京都: 思文閣出版; 1971復刻. p.394
- 14) 井上忠. 武谷祐之著『南柯一夢』. 九州文化史研究所紀要1963; 11: 87
- 15) 雑記. No.27
- 16) 注13)同. (上). p.351
- 17) 森永種夫編. 犯科帳(8). 長崎: 同刊行会; 1960. p.9-10
- 18) 雑記. No.100
- 19) 中川涼斎自筆稿. 中川涼斎詩藁. 瘦筇第3. (下関市立長府図書館蔵)
- 20) 戸塚武比古. 静海上府懐日記. 東京: 影印私家版; 1979. p.15
- 21) 下関文書館編. 御当家御役人前帳(史料叢書2). 下関: 下関市立図書館; 1971. p.92
- 22) 広江秋水遺稿(吉田樟堂文庫414). 「中川鯉淵老公の解綬を賀す. 詩並びに序」
- 23) 広江家文書(吉田樟堂文庫415). 築地玄通, 石井豊洲, 劉梅泉等の書簡参照.
- 24) 青木一郎. 坪井信道詩文及書翰集. 岐阜: 岐阜県医師会; 1975. p.98, 119
- 25) 注22)同. 「行齋兄を悼む」(七絶)
- 26) 注1)同. p.635
- 27) 三浦義臣. 岩邑年代記(8). 岩国徴古館. 竹本照三編; 1997; p.7(蔵元支配), p.45(手廻組支配)
- 28) 雑記. No.92
- 29) 雑録. No.81
- 30) 注27)同. p.29
- 31) 岡研介自筆稿. 万松精舎読書. 草稿(早稲田大学図書館. 洋学文庫蔵) No.5-9
- 32) 注27)同(7). 1996. p.80
- 33) 岩国市史編纂委員会. 岩国市史(上). 岩国: 岩国市役所; 1970. p.649. 万松庵は廃寺となったが, 位置は岩国徴古館所蔵の「御城山平図」(天明末)及び「旧岩国城下図」(江戸末)で確認できる.
- 34) 雑記. No.33
- 35) 岡研介自筆稿. 老子註(早稲田大学図書館. 洋学文庫蔵) No.54
- 36) 雑録. No.81-85
- 37) 雑記. No.33
- 38) 岡研介自筆稿. 天造堂漫筆(早稲田大学図書館. 洋学文庫蔵) No.6
- 39) 天理図書館善本叢書(和書之部) 編集委員会. 天理図書館善本叢書(同)80. 洋学者稿本集. 生機論. 凡例第三則. 東京: 八木書店; 1986. p.328-329
- 40) 岡研介自筆稿. 周礼医師職鈔解(早稲田大学図書館. 洋学文庫蔵) No.5, No.10-12
- 41) 雑録. No.84
- 42) 注13)同. 巻1. p.373
- 43) 下関市史編修委員会. 下関市史・藩政一市制施行. 下関: 下関市; 2009. p.668
- 44) 長寿吉・小野精一編. 広瀬淡窓旭莊書翰集. 東京: 弘文堂; 1943. p.43
- 45) 同上. p.45
- 46) 江馬文書研究会編. 江馬家来簡集. 京都: 思文閣出版; 1984. p.51
- 47) 注24)同. p.42
- 48) 大塚富吉. 帆足万里先生門下小伝. 大分: 日出町教育委員会; 1971. p.66
- 49) 注30)同. 本文は「岡研介門弟坂本周鼎(豊後日出人), 右, 研介病氣保養中, 療治向悉皆相頼置候間, 代脈として御囲ひ内出入差免被下候様願出, 御免. 但, 右弟子河村貫之, 藤山貫道, 相応療治向も心得居候に付, 横山内錦見御家中えも代脈被差免被下候様申出, 御免」となっている.
- 50) 中野操監修. 大坂医師番付集成. 京都: 思文閣出版; 1985. ⑳~㉔
- 51) 注48)同. p.32
- 52) 雑記. No.187
- 53) 注5)同.
- 54) 雑記. No.177
- 55) 注3)同. p.190
- 56) 筆録者不詳. 岡常用方(写本1冊. 吉田樟堂文庫1301)
- 57) 注2)同. 19
- 58) 注5)同.
- 59) 注23)同. 詩序中にも「今偶然之を研海に得たり」とある.
- 60) 中島棕隠. 金帚集(第3冊). 大坂: 秋田屋太右門等; 1839.
- 61) 注39)同. p.326
- 62) 同上. p.327
- 63) 同上. p.323
- 64) 同上. 解題. p.22-23
- 65) 拙稿. 高杉晋作の主治医石田精一について—変革期草医の「雅」と「侠」. 日本医史学雑誌2009; 55(4): 414
- 66) 注24)同. 「児安貞に示す」. p.326
- 67) 石原柳庵については『中川涼斎詩藁』や広江家関係文書, 武元登々庵『行庵詩草』等, かなり文献上にその名が散見する上, 柳庵の手になる墓碑が長陽地方に数種確認でき, 文人としても重んぜられていた. 尾崎秀民の下関寄寓は『日間瑣事備忘録』(巻80)で知られるが, 事績は小林義忠「初代高山泉知事梅村速水とその同志勤王の志士・尾崎秀民との出

- 会い」(飛騨春秋2003; 509: 17-21)に詳しい。
- 68) 拙稿。18世紀の下関医界と香月牛山門の三医について。日本医史学雑誌2008; 54(1): 44-45及び拙稿。小石元俊の水軍術伝授とその周辺。同誌2008; 54(4): 330-331
- 69) 高野長英全集刊行会。高野長英全集1巻。客中案証1。東京: 同刊行会; 1930。p.360
- 70) 注20) 同。p.10
- 71) 注43) 同。p.284
- 72) 堀哲三郎。郷土資料目録3。佐甲家系図。下関: 下関文書館; 1970。p.11。なお佐甲家の持仏堂であった中山寺(臨濟宗)には宗勝の位牌が確認される。法名、没年は文献に記載された通りであるが、それ以外の追加情報は得られていない。
- 73) 井上家に関する唯一の資料が「平生町裏町井上家井上家系図」(平生町立図書館蔵, 1971 原本複写)である。全15丁の内容は詳細であり、資料的価値が高い。最も新しい年次は禧之助の没年(昭和22年2月26日)である。またシーボルト参府時、本陣佐甲家にあった宿札を同家が所蔵していたが昭和49年に廃棄されたと付言する。墓所は岡家と同じ真覚寺(真宗本願寺派)である。本堂裏手に井上家累代墓(昭和30年建立)、井上静女(信厚女, 明治10年)、被葬者不明の平生屋(安永8年)と刻する3基が確認されるが、長く参詣が絶えているように見受けられた。明治期の信厚は佐甲家の「家屋地番別作り付及坪数目録及図面」(明治29年, 長府図書館蔵, 佐甲家文書②-4)にも捺印している。
- 74) 雑記。No.2, 20, 22, 49, 75, 94, 147, 180などに関連記事, 過去帳抜書等が散見する。
- 75) 雑記。No.180
- 76) 平生図書館編。改訂岡家略系譜(稿本)。1972。
- 77) 雑記。No.147
- 78) 田中助一。蘭学者岡研介および高野長英伝の補遺一特に長州(萩)藩御用商人熊谷五右衛門との関係について。蘭学資料研究会研究報告1963; 152: 15
- 79) 同上。22
- 80) 注3) 同。防長医事年表。p.34
- 81) 注2) 同。16-17
- 82) 庄内藩士の友人・池田玄齋の『弘采録』(自筆稿本, 酒田市立光丘文庫蔵)には「門人も百人余ありて」(第45冊), 「門弟も二百人計ありしとぞ」(第49冊), 「今は門人百五六十人もありて」(第65冊)と一定せぬが、ざっと百~二百人と見積もって支障はあるまい。
- 83) 注43) 同。p.721-723
- 84) 注82) 同。第49冊。
- 85) 山田家文書(下関市立長府図書館蔵)。山田蘭齋草稿。「横白杵先生(長府藩儒・白杵横波)の蘭を馬関に学ぶを送る」
- 86) 広瀬旭荘。日間瑣事備忘録。巻80。嘉永4年10月7日。多治比郁夫編。広瀬旭荘全集。日記編4。京都: 思文閣出版; 1984。p.383。なお詳細については、拙稿。吉田有秋の継父 田三畝に関する考察——長崎・久留米・下関での足跡を中心として——。医譚2010; 92を参照されたい。
- 87) 参考図書として利用頻度の高い『国史大辞典』, 『日本人名大事典』, 『国書人名辞典』, 『日本洋学人名事典』の岡研介の条には下関での寄寓開業の記載がない。

OKA Kenkai's Medical Achievements in Shimonoseki and a Discussion of the Various Circumstances Leading to His Decision to Live There: How Did Western Medicine Develop in a Port City Located on the Western Tip of Honshu at the End of the Bunsei Era?

Kazukuni KAMEDA

Kyushu International University

Oka Kenkai began practicing medicine in Shimonoseki following the conclusion of his training in western medicine in Nagasaki. He lived there from early spring in the 12th year of the Bunsei Era until mid-March of the following year. During that time, he wrote the "Oka-jyoyoho" and completed a translation of the "Seiki-ron". In addition, Kenkai established the school Seian-juku where he taught Western medicine to the approximately 20 students enrolled there. The school provided instruction not only in Western medicine, but also other subjects such as the Dutch language and physiology. Notably, Kenkai enriched the field of basic medicine and regarded systematic understanding of academics as important. He came to Shimonoseki in part because of his distant relative SAKOU, who was an influential individual from a prominent Shimonoseki family and a devotee of Dutch culture. SAKOU hired Kenkai as the family physician so Kenkai could look after his personal residence and the honjin (the chief hotel of a post-town). Although Kenkai was only in Shimonoseki for a short year, he left behind exceptional achievements in medical education and literary works.

Key words: Kenkai OKA, Seian-juku, Oka-jyoyoho and Seiki-ron, Munekatsu SAKOU,
Western medicine of Shimonoseki